



Title	哲学カフェ三者三論
Author(s)	武田, 朋士; 渡邊, 美千代; 藤本, 啓子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2005, 14, p. 4-10
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8959">https://hdl.handle.net/11094/8959</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 哲学カフェ三者三論

### 「これが私の優しさです」

一須磨友が丘高校の生徒たちとの対話と彼女／彼らの優しさ

武田朋士

友が丘高校で講師をされている藤本さんからお話をいただいて、10月22日（金）、26日（火）の両日、友が丘高校で、哲学的対話を高校生と行う機会を得た。臨床哲学研究室から三浦、桑原、武田が参加し、三浦グループと武田グループの二つに分かれた。

武田が進行、桑原が記録を担当したグループでは、「これが私の優しさです」\*という詩を読んで、それについての疑問・感想を述べてもらうところから出発した。漠然としたテーマとして「友達・仲良し」を考えていたが、それは、同じクラスの人もいる中で話づらいテーマではないかと思い、テーマとしてやや離れるが、一つの詩を共通の経験とする形をとった。

出席者は、一日目が17人で、二日目が13人。最後に書いてもらった感想から、進行役の緊張、それによる「テンションの低さ」(!)が、生徒に大きく影響していたことがわかったが、それでも、二回目になるとそれなりに活発な対話が行え、生徒たちの中にかすかながら気づきもあったようだった。

初日は、流れの悪い時間だった。先に書いたように、進行役の緊張は生徒たちにとってテンションの低さとして映り、やりにくい雰囲気をつくっていたようだった。最初にある生徒に詩を朗読してもらい、それから、詩の中にでてくる「私」と「あなた」の関係、なぜこれが「優しさ」なのかなど、疑問とそれに対する自分の考えを述べてもらうところから入った。「私」と「あなた」の関係がどのようなものであるかを確定させる必要はないし、もちろんそのようなことは無理なのだが、それぞれの捉え方があるということを確認しているだけで、他人の考えに反応するという場面をつくることができなかった。私と生徒との1対1の関係を無数につくっているだけの状態をどうやってほぐしていけばいいのか戸惑った。そのうち、詩で話すことも難しくなり、自分の経験の中から「優しさ」について話

してもらうことにした。そのなかで、「優しくする」ということの語りにくさの話がでたので、今回はそれについて考えてきてもらうというところで初日を終えた。

これも後で感想からわかったことだが、私にとって1対1の閉ざされた対話になっていると感じたものも、当然、皆の前でなされているのだから、完全に閉ざされているわけではなく、周りで聴くだけでもある意味で対話に参加していることになるようだった。自分が参加者であれば当然気づいていたようなことかもしれないが、進行役に立つことで見えなくなっていたように思う。問題は、発言の仕方への生徒の戸惑いにあった。

初日は机をコの字型につくり、席順をこちらで指定していた（仲の良いもの同士での私語を防止するため）が、二日目はそれをやめ、椅子だけで小さい円をつくってもらい、席を自由にした。それぞれの体験の中から「優しくする」ということについて考えてきたことを話してもらったのだが、総じて、やはり「優しくする」ということに潜む「嫌らしさ」（それは、「見返り」を求める行為である）について話す生徒が多かった。「優しくする」という表現に抵抗があるようだった。とはいえ、なかには、「優しさ」は「自然」なものでなければならないという意見に対して、「優しくしたいという気持ちが自然に出てきたらどうするのか」というシャープな問いもあり、「優しさ」という問いが生徒になじんできているようだった（生徒の感想から、初日は、「優しさ」を問うこと自体にも動揺があったようだった）。また、一度自身の経験に立ち返ったことで、詩に対する疑問も身に迫るものになったようで、最後に改めて「これが私の優しさです」と言い切っていることをどう考えればいいのかということが問われた。そうして、「見返り」を求めない「優しさ」が語られているということ、したがってすべて「優しくする」ということが「嫌らしい」わけではないことという主旨のことが話された。最終的に詩に戻ってくるとは思わなかったが、そのことによって、自身の経験のなかでの「優しさ」と他人が考える「優しさ」とを交差させるだけではなく、更に詩の中で語られている「優しさ」をいくらか交差させることができた。詩の捉え方が変わったというのは、予想していなかった結果だった。

基本的にはしっかりとした考えをもち、それを言葉にすることのできる生徒たちばかりだったので、問題は、発言の仕方をこちらでどのように整えるかが重要であったと思う。発言の仕方、それに対する戸惑いが生徒たちにあったことがわかったのが、二日目に席を自由にするので活発に意見が交わされたからである。席を自

由にすることで、生徒の側の緊張はほぐれ、何よりも、とりあえず話すきっかけを友達に話しかけるようにすることで作り出せていた。発言の仕方の戸惑い、それは、どこに／誰に向けて話せばいいのかわからないという戸惑いだった。ここには、進行役の緊張がテンションの低さとして映るということも関係している。とりあえずは進行役に向けて話しかければいいのだが、それがしにくかったのだ。隣に友達が座っていれば、同意を求めつつ、ほとんどその友達だけに話しかけるようにして、意見を述べる事が出来ていた。それは、私語との境界が危ういものではあるが、それを私語と見做してしまわず、発言として受け取ることも可能だと思う（もちろん、すべてがそうではないし、進行役の拾い方がポイントになる）。

今回の対話では、どこに／誰に向けて話すのかわからないという戸惑いに対する先導をかってでくれた生徒がいた。その生徒の感想には、「これが私の優しさです」と書かれていた。その生徒をはじめとする、参加してくれた生徒の「優しさ」に助けられた対話だった。対話に参加してくれた友が丘高校の生徒に、そしてその場を提供してくれた藤本さんに、改めて感謝したい。

\* 「これが私の優しさです 窓の外の若葉について考えていいですか／そのむこうの青空について考えても？／永遠と虚無について考えていいですか／あなたが死にかけているときに あなたが死にかけているときに／あなたについて考えなくてもいいですか／あなたから遠く遠くはなれて／生きている恋人のことを考えても？ それがあなただを考えるとつながる／とそう考えてもいいですか／それほど強くなってもいいですか／あなたのおかげで」（谷川俊太郎『空の青さをみつめていると』、角川文庫、1968年）。

（たけだともひと）

## 日常を紡ぐことの哲学的感受性

—看護教育における哲学カフェの試みから—

渡邊美千代

### 1. はじめに

哲学的な感受性とは特別な感受性のことをいうのではないと考えている。感受性というからには、何か対象があって、そのものを知覚し、感じることはあるが、敏感になり過ぎて、本当のことが見えなくなったり、わからなくなったりすることもある。哲学的感受性は、ほどほどの感受性であって良いはずである。しかし、誰もがほどほどの感受性が身に付くものでもない。ほどほどの感受性に加え、ある特定の物事や現象にフィットする感受性、そしてそのことに疑問や問いをもつことが、哲学的な感受性を身につけられるプロセスの始まりとも言える。

今回、看護教育の教養科目である教養ゼミナールに哲学カフェを試みた。その報告と実践報告をもとに、看護教育における哲学的感受性について検討したい。

### 2. 教養ゼミナールにおける看護学生の哲学カフェの試み

今回の看護学生対象の哲学カフェは、教養科目である教養ゼミナールの一環として行った。「生活現象の中でのこころとケア」をテーマとして1年次の前期に看護学部生8名に対話中心型の授業を試みた。石田春男著「ふりの自己分析」（講談社現代新書）を購読し、その中の疑問点を身近な日常的な問題に置き換え、徹底的に議論するというスタイルである。90分授業、15回で、その中間である8回目の授業で中岡成文先生（進行役）に来学して頂き哲学カフェを行った。

教養ゼミナールの概要は以下に示す。

#### 1) 教養ゼミナールの概要（対話中心型の授業の試み）

テーマ：生活現象の中でのこころとケア

対象：1学年の看護学部生

学習方法：

生活体験から起こる我々のこころの動きに着目し、石田春男著「ふりの自己分析」（講談社現代新書）の担当項目を発表し、各自が課題設定する。

発表内容に基づいて対話を積み重ねながら、生活の場におけるこころのゆくえとケアについて対話する。

その日の発表内容から疑問や問いを出し、さらに対話を重ねる。

～の対話を活かし、これまでの日常生活における疑問、問いをテーマに哲学カフェを試みる（90分）

## 2) ゼミの進行状況

各自の発表から次ぎのような疑問や問いが提示された。

- ・ 看護者は、ふりなしに患者に接することができるか
  - ・ 患者がふりをしないでケアを受けることができるか
  - ・ 学校の自分、家にいる自分、ふりのない自分はあるのか
  - ・ 日常的なふりは、性、国、民族によって異なるのか
  - ・ 本当の自分＝今の自分なのか
  - ・ 良い子のまま大人になった人は、そこから脱皮できるのか
  - ・ 良い子としての自分を放棄するってどういうことか
  - ・ 時代を伴ったふりはあるのか
  - ・ 自己の死は、しめくくりとしてのふりだろうか
- などのいくつかの問いが出され、対話を行った。

そのひとつである「自己の死」についての問いでは、「死は私の外にあるのか?」「私の内側にあるものか?」といったことが対話の中心となった。私の死は、自分しか体験できないことから外側にあるのではなく内側にあるはずである。また、生が死の意味を強調し、また死が生の意味を強調することを考えると死は、内側にも外側にもあり、また内と外の間にもあるのだとも考えられる。といった対話から「安楽死」を考えるにも自分がどうしたいかを決定するまでのプロセスを自分だけで考えるのではなく、自分の外に在る人と一緒に考えながら決めていきたいといった結論に達した。「生と死」は、私のものであって、他者のものでもあるということである。

## 3) 看護学生の哲学カフェ

その後、学生に哲学カフェのテーマを募り「人はなぜあいまいな表現をするのか」が選択された。

「人はなぜあいまいな表現をするのか」のテーマを提示した学生は、日ごろ、友人や学友との関係性の中で「あいまいな表現」をして、その場を逃れている自分自身もどかしく感じ、その中から出された問いであった。学生の間では、「微妙だね」「・・・ぼい」といった言葉を日常的に使う。しかし、あいまいな表現をとることで、中立的な立場を保つ為の「ふり」のひとつであることを導いていく。また、良い人間関係を保つための自己防衛でもあり、あいまいな表現を使い、自分の言葉に責任をもつことを避け、「たぶん・・・」「・・・のような気がする」といった言葉を日常的に使っていることに学生は

気づく。その人を傷つけない、その人から信頼を失いたくないといった思いがある。つまり人間関係を良好に保ちたい、うまくいかない関係を逃れるためにも「あいまいな表現」を使い、それが友人関係を保っているのではないかといった対話が続けられた。学生は、日常的に自分と学友、友人との関係に問いが向けられることに直面している。

## 3. 「あいまいな表現」を使うことのクライアント-ナースの関係性

今回学生は、人との関係性の中で「あいまいな表現」を使うことに問いを向け、日常的な体験から答えを導き出そうとした。日常的に何気なく使っている言葉が、差し当たり、現実とぴったり適合することなく自分を表現していることも多い。自らを表現するということは、「あいまいな表現」であってもひとつの意思を表出することであり、自分自身が選択して、相手との在り方を決めていることになる。

クライアント-ナースの関係においても「あいまいな表現」を使って会話することがある。あいまいな表現は、相手を傷つけないといった意思の現われでもある。しかし、あいまいな表現を使ったナースは、「もっと別の表現の仕方がなかっただろうか。」「かえって信頼を失ったのではないだろうか。」と考えることもあるのではないだろうか。

Kim (2003) は、『看護学における理論思考の本質』(The Nature of Theoretical Thinking in Nursing) クライアント-ナース現象にケア哲学的意味合いについて述べている。Kim は、意味合いで分類した場合のクライアント-ナース現象領域における現象例には、接触現象、コミュニケーション現象、相互作用 mutuality 現象がある。その中で最も重要なのは、ナースがクライアントと相互作用するときであると主張している。さらに、ナースとクライアントとのやりとりには、人間の尊厳や自律性の倫理的価値観があらゆる看護行為を通じて守られ、患者の権利が擁護されることであり、看護学においてケアの哲学の実行で最も重要なのは、ナースがクライアントと相互作用するときであると述べている。(139)

もし、「あいまいな表現」でクライアントに伝えようとするとき、例えばクライアントに心配させないように「あいまいな表現」で言ったり、クライアントにとってあまり良くない出来事を「あいまいな表現」で伝えたりすることにジレンマを感じるのは、クライアント-ナースとの間に人間の尊厳や自律性の倫理的価値観に大きな影響を及ぼしているからである。「あいまいな表現」を

クライアントは、ナースの気遣いとして受け入れることもある。その場合は、お互いの気遣いを分かち合うという共在の関係を相互が選択したといえるのかもしれない。クライアントーナースの共存 (presence) は、あいまい (ambiguity) で、漠然としたどっちつかずの言葉、その場を逃げたような表現を使ったとしてもクライアントーナースの距離間は遠ざかっていくものではないと思われる。

#### 4. 日常を紡ぐことで哲学的感受性は育つか。

医療の現場は、日々生活する日常性の体験とは異なる。言い換えるならば、医療といった現場が、日常的でない非日常的な場であると言ってよい。人は日常的な体験から離れることに不安を感じる。というのは、我々はいつも日常性から出発し、日常性に帰ることで、自らの存在的な価値を見出しているからであろう。つまり日常性は、我々のすべてを基底している。日常の中で、感じる、そして思考を紡ぐことに哲学的感受性が育まれると考える。哲学的感受性は、日常性から出発することが望ましく、過敏でないほどほどの感受性に、時として鋭敏な角度から見ると視点が求められる。それは、ナースの側から捉える日常ではなく、他者であるクライアントの日常を捉えることの感受性を養うことにも通じることもあるように思う。ほどほどの感受性に加え、ある特定の物事や現象にフィットする感受性とは、鋭敏な角度から見られる日常性への視線である。日常はいつも自分自身にまわりついてくるものである、また日常にどっぷり浸ってしまう我々の身体がある。そのことは身体が日常に沈殿していくと同時に、日常に浸らずして生活できない身体があるということである。その身体によって日常生活体験が積み重ねられ、価値づけされた行為への理解を日常に求めようとする。哲学カフェに提示される問いは、日常といった私的であり、また公的な場に自己価値の理解を求めていると言える。

#### 5. おわりに

哲学カフェは、日常の問いから出発し、自らの体験を言葉にして表現し、対話を重ねながら共同思考している。それは、物質的な身体の実在性 (reality) な体験とは異なった連続的で留まることない生きている生命体として存在者のアクチュアリティ (actuality) な体験を浮き彫りにすることでもある。実在性 (reality) とアクチュアリティ (actuality) 双方の共同思考を繰り返すことで、より普遍的な答えを見出すことが可能となる。実在性 (reality) からは「ほどほどの感受性」が生まれ、「あ

る特定の物事や現象にフィットする感受性」は、アクチュアルな中から浮き彫りにされるのではないだろうか。

誰もが、日常の中で何らかの疑問や問いを向けながら生活している。しかし、日常生活する者へのケアを志す看護学生は、自らの日常体験を他者が体験するとしたらどんなリアリティ (reality) とアクチュアリティ (actuality) な体験になるのかを言語表現化していく機会が少ない。哲学カフェでは、その過程を経験する機会を得ることができる。また看護学生は、その人がその人らしく生きられるように日常への視線を向けると同時に医療の生々しい現場に目を向けることが要求される。視線を向けながら実践するにあたっては、知識の詰め込みだけでなく、日常の問いから出発し、日常の中で答えを見出し、病む人の人生を大事にする哲学的感受性を身につけてほしいと願う。

私自身、哲学的な感性を身に付けたいと思い、哲学的感受性に憧れをもつひとりである。ここまで述べてきた「日常を紡ぐことの哲学的感受性—看護教育における哲学カフェの試みから—」に偏りがあればご指摘頂きたく思う。

最後に今回、哲学カフェにご協力頂きました中岡先生に深く感謝致します。また、興味と関心を示し、参加してくれた学生、この機会に関わって下さったすべての方々にお礼を申し上げます。

#### 引用・参考文献

1. Hesook Suzie Kim(2003),The Nature of Theoretical Thinking in Nursing Second Edition.Springer Publishing Company.(鶴重美監訳.(2003).看護学における理論思考の本質,日本看護協会出版会, p 139.)

(わたなべみちよ)

## 「哲学カフェ」によせて

藤本啓子

### 哲学カフェとの出会い

「哲学カフェ」に関する全体討議から始まって、最近では「コミュニケーション・デザインセンター」設立に向けて「哲学カフェのお約束」や、「哲学カフェをめぐる議論」が活発になされるようになったので、そのような動きや方向性に関する事柄ではなく、ここでは、私の「哲学カフェ」との出会いから今日までについてのあれこれを振り返りたいと思う。

大阪大学臨床哲学研究会との出会いは、確か1999年ごろ、ちょうど私自身が大学の研究室を去り、臨床の知とはどのようなものか、という思考を繰り返していたころであった。ある方の紹介で、その当時の私の希望がかなうことをやっているところ、さらに通える範囲の場ということで、臨床哲学研究会を紹介され、「その活動の様子を同封します」と同封されていたのが『臨床哲学』の創刊号であった。「そこではナースとか、学校の先生など様々な分野の社会人が通っていて、なかなかおもしろいところですよ」とその方は言うておられた。それがきっかけとなって、今日に至っている。

しかし、最初はSD（ソクラティック・ダイアログ）や「哲学カフェ」と言われても、海外での取り組みは紹介されていたものの、一体どのようなことをやるのかよくわからなかったし、当時はメンバーの中でも半ば手探り状態で、共通認識もまだなかったように記憶する。そこで、とりあえず、わからないものは、一緒にやってみるしかない、と思ったこと、また、あまり形式にこだわらないで〈場数を踏む〉ことの必要性をどこかで感じるようになったことから、相乗りしてみよう、という思いが、現在の私の役割を決定したように思う。

いろいろな場に赴いて「哲学カフェ」や「哲学的対話」の紹介をする上で一番難しかったことは、頭に「哲学」あるいは「哲学的」という言葉がつくことの意味を説明することであった。単なるおしゃべりや会話、あるいはディベートでも議論でもない、では「哲学的対話」とはどのようなものなのか、あるテーマに沿って行われるワークショップや座談会とどう異なるのか、という質問が圧倒的に多かった。いずれにしても何人かの人間が時間を作って、ひとつの場に集まらなければならないので、漠然としたものでは人は集まってはこない。それだけでなく「哲学」という言葉は、あいまいで一つまちがえば「き

な臭い」何かの宗教団体のようなニュアンスをもたれることもある。その点、「阪大の臨床哲学」という名前はある種の安心感を与えたことは否めない。

ただ、私がこのように臨床哲学研究室と相乗り状態で「哲学的対話」を広めたいと思ったのは、やはり、対話の必要性を感じていたからだと思う。また、このごろはなにかと感情に焦点をあてた取り組みの重要性が謳われているが、人間が知性と感性を合わせもった生き物であるとするならば、両者のバランスが大切で、「身体に正直であること」も大切であるが、「当たり前だと思われることを改めて問いなおしてみたり、自分を客観的に見つめる」知的ワークも重要ではないかと思う。

哲学的対話と対象的なワークショップとして、自分の感情の動きを理解し、表現することによって自分か絡んだ関係性を分析する、というものがある。感情に焦点を当てるということから、参加者はかなり感情を吐き出すことができるので、結果は良好（すっきりした）な場合が多い。しかし、それだけでいいのか、という思いを抱くのも事実である。確かに感情が大切にされる空間をつくる、ということは、解決できないことを解消する上では「すっきりする」とか「気が楽になる」という効果はある。しかし、そのあとで自分たちの課題は何なのかと問いをたて、反省する作業（思考過程）も必要なのではないか。

その点哲学的対話はケアの領域では難しいと思う。特にケアを必要としている人に対しては無理な面がある。しかし、ケアにかかわるスタッフにとっては、自分がなぜこの場に臨んでいるのかを絶えず自分に問うていく上では大きな意味をもつのではないかと思う。

これまでは哲学的対話を広めるという目的を主眼とし、ほぼ無償に近い形で実験的に活動してきたが、今後、臨床哲学研究室のメンバーが〈大学〉という枠組みから外れて（大阪大学臨床哲学研究室というブランドなしで）「ソクラテス的対話」や「哲学カフェ」の実践を通じ、どのように社会にコミットしていくのか、またどの程度対価を要求できる団体となるのか、今後も引きつづき相乗りさせていただけたらと思う。

### 「哲学カフェにおける進行役の役割」について

「哲学カフェ」を行う上での重要な役割として、ファシリテーター（進行役）というものがある。

「哲学カフェ」の進行役としてどのような〈対話〉を行うかということは、どのような〈場〉に臨むかということと大きく関係しているように思う。

〈対話〉と対話の行われる〈場〉との関係は、たとえ

ば何らかの共通の目的をもった等質のグループが〈哲学カフェ〉に集い対話をするという場合と、目的も動機も全く異なったフィールドに属する人からなる異質のグループが共通のテーマのもとに集い対話をする場合とではそれぞれ異なってくる。等質のグループの場合、目的が同じであるだけ、対話の方向性もある程度限定されてしまい、果たして〈開かれた場のシンボルの表象〉である「カフェ」の名にそぐうものかどうか、ということは再三言われてきたことである。

では、「哲学カフェ風対話」ではどうか。いずれにしてもそれはこちらが区別することで、その場に集う人たちにとっては、事前に哲学的対話に関して説明をするにしても、哲学的対話に不馴れなため、「抽象的で痒いところに手がとどかない」という感じを与える場合が多い。しかしその一方で、不馴れであるがゆえに「おもしろかった、興味深かった」という感想も出てきたように思う。したがって、ある程度回数を重ね、哲学的対話に慣れていくことが好ましい場合もある。

共通の目的を持ったメンバーとの対話では、その目的のために抱え込まざるを得ない様々な問題が露呈してくる。したがって、自分たちのかかえている問題解決という志向性が強く出るか、(ストレスなどからくる)感情の発露を求めてしまうという点で、自分たちの直接的な課題から少し距離を置いて、問題を一般化し、客観的に眺めていく、という作業がむずかしいように思う。対話を通して自分たちの気持ちが軽くなる、あるいは何か解決を見出し出していける、という多大な期待をもってしまうこともある。

あるテーマについて他のメンバーの意見を聴くということは、それを聴いて自分でも考えたいという気持ちと、日ごろ他のメンバーが何をどう思っているのか本音のようなものを聞きたいという両面がある。しかし後者が先行してしまうと「哲学的」な対話ではなく、現実的な対話になってしまうこともあり得る。また、「信頼関係があったので何を話しても大丈夫だという安心感があった」という感想は、信頼関係がないと何も話せない、ということの裏返しでもある。例えば、そのグループの関係性(例えば上下関係、一般市民と専門家等)が影響して、本音では話せない、仮に話すことができたとしても、そのことによって、メンバー間の温度差のようなものが対話で露呈されてしまったりすると、その後の人間関係に悪影響を与えることもある。

したがって、抽象的なテーマで対話をすることの重要性もそのようなところにあり、その意味では、ファシリテーターの役割も大きい。等質なグループであるがゆえ

に行き詰まって、介入が必要となる、ということもある。

だが、個別の問いを一般化して、それをまた自己に戻すという作業がうまくいかないと、グループがかかえこんでいる課題のようなものだけが露出してしまい、うまくそれを自己の問題に還元できず終わってしまうこともある。そのような中、時間的な制限から、十分に対話できないまま時間切れで終わってしまうと、なんとなく〈微妙な問題〉をかかえこんだままで終わってしまったということもあるだろう。しかし、考えようによっては問題が明確になった、ということで成功だともいえる、つまり、自分たちにとって何が問題であったのかということ意識した、というメリットもある。

また異質なグループでの対話は、メンバーの多様性からテーマに対する思い入れも多様で、どれに論点を絞って対話を進めていくかという問題がある。また思い入れが強いだけメンバー間で感情的な対立を産む可能性もある。メンバーが感情的に反応した場合は、それをどうおさめるか、おさめる必要があるのか、どう抽象的な議論にもっていくか、など、現実的に難しい問題も生じてくる。各自がその問題を自分の問題として持ち帰る、ということも哲学的対話にとっては必要なことであるが、いたずらに不満だけをかかえて帰るということも十分あり得る。

そこでファシリテーターとして、どのような介入が必要か。ファシリテーターは、問題の論点を絞り、参加者がお互いの差異を了解しあう作業を手助けするものの、対話の内容には介入しない、ということが基本であると言われている。しかし、それは2時間～3時間という時間内では難しいケースもある。では、積極的に介入するかどうか。時間的な問題は多少解消されるかもしれないが、論点を絞りすぎて具体化してしまい、そこから問いを一般化するというところまでいかないと、差異のみが浮き彫りにされて、消化不良を起こしてしまう可能性も出てくる。またファシリテーターが中立性を欠くと、参加者の意見を独断でまとめたり、特定の参加者に対して疑問を投げかけたりすると、議論の流れを支配してしまい、違和感を感じてしまう他の参加者を置き去りにしてしまう、ということもある。

いずれにしてもある程度グループのダイナミズムに任せ、あまり介入を行わないのがファシリテートの原則ではあるが、どの程度介入を行っていくかという〈さじ加減〉が、ファシリテートの難しさであり、ファシリテーターの力量が試されるころだと思う。要は、グループの志向性に引きずられない(舵を取られない)ということである。基本はニュートラルであるということだが、

## 臨床哲学のメチエ

その〈場〉のダイナミズムを読み取る感性というものも大切なのではないか。要は、場数を踏んで洗練されていくことだと思う。

(ふじもとけいこ)

